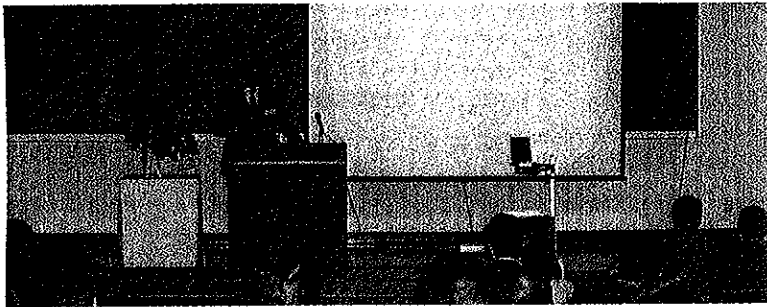


《特集》ブロック研究会活動報告



60年度に発足したブロック研究会は活動準備期間とされた2年間を順調に経過し、本年度からより一層本格的な研究活動を推進する段階となりました。また、学会補助金もあらたに「ブロック別補助金」が予算化されました。

本号は、各ブロックから本年度のこれまでの活動状況をご報告いただき、特集としました。

●北海道ブロック

- リーダー / 浅川修二 北海道武蔵女子短期大学
- サブリーダー / 白川智洋 静修短期大学
- 運営委員 / 大賀 淳 北海道武蔵女子短期大学
- 丹治和典 静修短期大学
- 能登洋子 札幌大学女子短期大学部
- 和野内崇弘 静修短期大学

昭和62年度北海道ブロック研究会活動報告
 ブロック研究会の活動は2年目を迎えました。が、本年度の研究会開催を中心とした活動内容は、概略、以下のとおりである。

第4回研究会
 4月25日(土)、第4回研究会が静修短期大学において開催され、非会員10名を含む25名の出席があった。ここでは、北海道拓殖銀行人事部長(当時)津山広行氏に「女子の能力開発」についてご講演いただいた。講演は、同行における女子行員の研修体系を踏まえた、企業の人間教育の実態についてのお話であったが、特に、知識や技術だけ詰め込まれた人間ではなく、豊かな人間性を持った人間になってほしいという企業現場の率直な声に対し

て、出席者の多くは首肯しきりであった。

第5回研究会
 第5回研究会は、11月28日(土)、札幌大学女子短期大学部で開催され(出席者:16名)、研究発表が行われた。発表テーマおよび発表者は、次のとおりである(発表順)。

『秘書教育における海外研修』
 能登洋子(札幌大学女子短期大学部)

『本学における秘書教育について』
 平野昌子(日本ビジネススクール札幌校)

『企業内教育と学校教育の際(はざま)』
 矢田貝紀雄(北海道文理科短期大学)

『秘書教育と職業意識』
 丹治和典(静修短期大学)

能登先生の発表は、同大経営学科秘書専攻の学生を対象に実施されている海外研修の事例報告であった。「秘書特殊演習」という専門科目の展開のなかで実施されている当研修の目的、事前・事後の指導体制などについて説明された。

平野先生の発表は、同校における秘書関連教科の実践報告であり、展開上の問題点ならびに指導上の工夫などに触れ、専修学校の秘書教育の現状についても言及された。

矢田貝先生の発表は、本人の長期にわたる銀行での実務経験から、企業内教育担当者か

ら見た学校教育に対する期待を具体的に提示し、学校教育の問題点を指摘された。

丹治の発表は、短大における秘書教育の方向性の一端を職業意識の高揚に求め、現在の短大生の職業意識の実態を踏まえ、教育場面における意識の高揚にかかる方策を模索するものであった。

発表後、和野内崇弘先生の総評があり、事例研究の研究手法の精査などについてコメントを述べられた。

以上が、本年度の研究会開催についての報告であるが、これらの内容を盛り込んだブロック会報「せくれたりー No.2」は63年1月に発行予定である。(丹治和典 記)



●関東・東北ブロック

- リーダー / 高月東一 東京工芸大学女子短期大学部
- サブリーダー / 森脇道子 産業能率短期大学
- 運営委員 / 天野恒男 東京家政学院短期大学
- 植竹由美子 学校法人東北外国語専門学校
- 大宮 登 山形女子短期大学
- 木下雪江 共栄学園短期大学

- 佐藤啓子 常磐学園短期大学
- 白井 勇 専門学校第二中野スクール・オブ・ビジネス
- 高井由喜雄 学校法人川口学園
- 中佐古 勇 日本橋女学館短期大学
- 西谷正弘 専門学校東京スクール・オブ・ビジネス
- 藤田利久 産業能率短期大学
- 堀江 光 城西大学女子短期大学部

溝口知子 東京工芸大学女子短期大学部

3年目の62年度ブロック研究会は定着と活動の1年であったが、規模的拡大(会員数200名あまり)により、ミニ学会の様相を呈して来た。

そこで、会員からのアンケートによってこれからのブロック活動への要望を聞き、運営方法に工夫を加えることを考えている。

なお、昨年度の研究会活動は次のとおりである

研究会活動

第4回研究会

開催日 昭和62年3月28日(出)

場所 早稲田速記学校

参加者 80名

早稲田速記学校の生方教允氏から、「医療秘書科設置17年の教育実績に基づき、「医療秘書教育の目標と問題点」と題して、「医療秘書養成における目標は、社会的ニーズに基づいた能力ある秘書の養成」であり、「問題点は、医療秘書教育機関がそれぞれにカリキュラムを組んで教育することが、医療界に不必要な混乱を招き、医療秘書の質や社会的地位の低下をもたらしかねない。これを解決するためにもニーズレベルでの共通カリキュラムを共に考え、実施していくことである」との発表がなされた。

福島女子短大の藤田利久氏からは「地方企業の抱く秘書像を考える」と題して、「地方都市にも、秘書が職業として定着し始めてきた現在、秘書養成機関としては企業が求める秘書像を把握しながら、教育を進めることも必要であるが、企業に対しても教育機関からの働きかけをしていく必要がある」との発表がアンケート結果に基づいてされた。

第5回研究会

開催日 昭和62年11月7日(出)

場所 東京工芸大学女子短期大学部

参加者 79名

ケンブリッジ・リサーチ研究所セクレタリー・サービズ部部长、名取都留氏から「これからの秘書に何が求められるか—資質と技能をめぐって—」と題して、秘書を扱ってきた長年の経験から、秘書の職業としての確立を図るために、日本の秘書の現状と課題・秘書教育担当者への要望についての講演があった。

続いて、2会場に分かれた第1会場で、城西大学女子短大部の大橋進一郎氏から「セクレタリーの語義—OEDに見られるセクレタリーとクラークの差異—」と題して、「セクレタリーの語源『secretarius』は非常に多様な意味を持ち、必ずしも『上司を補佐する人』と定義するのは、本質的には危険なことである。補佐的役割は歴史的過程で付与された意

味であることに注目する必要がある、セクレタリーとクラークの差異を整理するならば『セクレタリー』は秘密保持に関する信頼を基礎に柔軟に仕事を行う者、『クラーク』は学識を基礎として機械的に仕事を行う者と要約される」との発表があった。

第2会場では、共栄女子短大の鐘ヶ江弓子氏から「国際化時代の秘書実務教育—秘書英語を中心として—」と題して、短大と4年制大学での授業担当者としての立場から、「秘書実務教育のなかで英語を使う教育はあまり行われておらず、たとえ、行われていたとしても相互の関連がなく、総合的教育ができないところに問題がある。さらに、日本語を含めて英語の正しい使い方、状況対応能力、注意力、集中力などの基礎的な教育訓練が必要で、その上に立って、秘書現場に近い状況設定での実践指導に力を注ぐ必要がある」との発表があった。(編集委員・藤田利久 記)



● 中部(東海・北陸)ブロック ●

●リーダー / 横山静祺 市邨学園短期大学

●サブリーダー / 奥 喜久男 東邦学園短期大学(東海地区)
吉田寛治 金沢女子短期大学(北陸地区)

運営委員

- 〈東海地区〉伊藤和子 市邨学園短期大学
河村眞澄 名古屋短期大学
島本みどり 東邦学園短期大学
水野清子 岡崎女子短期大学
- 〈北陸地区〉岡野絹枝 富山経済専門学校
奥村眞澄 仁愛女子短期大学
北潟克輔 金城短期大学
水谷内徹也 星陵女子短期大学

(東海地区は中村健壽氏に運営委員になっていただくことを予定しております)

当部会も3年目になり、部会のうちにも若干の変貌を遂げているように思われる。

先ず2つの部会の研究会について報告すれば次のようである。

東海分会

第1回研究会 5月30日(出)

会場 愛知会館

出席者 20名

研究発表

1. 発表者 富田義孝先生

「秘書に必要と思われる法律知識について」

第2回研究会 10月24日(出)

会場 愛知厚生年金会館

出席者 20名

研究発表

1. 発表者 安福恵美子先生

「接客教育における語学教育の応用—コミュニケーション能力養成にむけて—」

2. 発表者 荒川恵美子先生

「秘書教育におけるメディアの活用法」

北陸分会

第1回研究会 5月30日(出)

会場 金沢女子短期大学

出席者 9名

研究発表

1. 発表者 岡野絹枝先生

「コミュニケーション・スキルの指導法に関する一考察」

第2回研究会 11月1日(日)

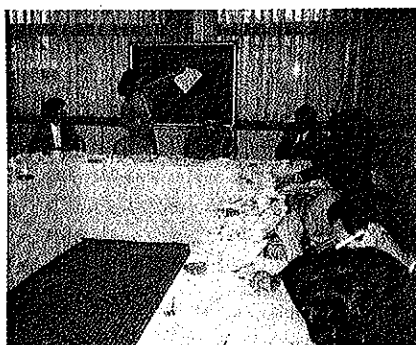
会場 ホリデイ・イン金沢

出席者 10名

研究発表

1. 発表者 北潟克輔先生

「北陸における女性秘書の探究」



以上のように各分会共に現在まで2回の研究発表を行っている。筆者は北陸分会には、第2回の発表会に出席しただけなので十分な説明は出来ない。しかし基調講演の内容については「秘書学の研究をしている者が、その理論の骨である方法論についてのが良い」との意見であった。

また東海地区での安福先生の発表は、語学教育の方法を秘書教育、特に接客に応用、適用されるのではないかについて説かれている。これは当然「接客」概念の規定の問題に進まなければならない。ただの教育の方法から一歩進めなければならない事を感じた。

荒川先生の論旨には感じるものがあった。それは第1回の研究会の雑誌の中から生じたものであった。現代学生の気質や実務教育での現実性を教育するためには、学生に視覚的なものが必要であるのではという話になった。その結果、荒川先生にTVの利用について話してもらったことになったのである。ところが発表されたものは、教育におけるメディアの必要性と各メディアの効用を論ぜられたのであった。これは視聴覚教育の具体的な個別別的なものを論じたものではなく、メディアの一般的なものから研究を進められたものであった。これらの報告のことから、本質を見極めて具体的なものを見つめる傾向を感じたものであった。

また、第1回の研究会では、秘書と法律の問題も初めてとりあげられた。このように部会員の研究は単なる報告より脱皮の傾向を感じた。

しかし、部会としての問題がないわけでは

ない。その第1は、出席者が固定化という傾向があることである。第2は、北陸と東海の

地域的な問題である。会員相互には一体感もっているが、年1回の合同研究会も実施出

来ない。今後はこれ等の問題にとりくまなければならない。(横山静棋 記)

● 近畿ブロック

- リーダー / 田中篤子 松蔭女子学院短期大学
- サブリーダー / 福永弘之 兵庫県立姫路短期大学

- 運営委員 / 荊木淳己 京都短期大学
- 宇都宮垂徳 園田学園女子短期大学
- 緒方真澄 平安女学院短期大学
- 武田寿子 大阪医療技術学園
- 矢野智恵子 京都経営経営専門学校

第3回研究会は、昭和62年3月27日、神戸の松蔭女子学院短期大学で行われました。主催校あいさつのち研究発表にうつり、「秘書教育における『話し言葉』の問題点」と題して、駿台外語専門学校の白村治子先生の発表がありました。アナウンサー出身だけに非常に実践的な教育方法が披露され、大いに関心をもって聞き入りました。主催校の松蔭女子学院からは、中村安治先生の「秘書教育における3つの視点」と題する発表がありました。「オフィス・テクノロジー」「インターパーソナル・スキル」「経営的な判断力」の3つの視点に立って教育目標マトリックスを作り、そして秘書学の体系を作りあげていく、実践の上に立った秘書学体系化への試みとして興味ある発表でした。梅花短期大学の笠原多恵子先生は「スーパーヴァイジング・セクレタリー」(秘書のスーパーヴァイジング機能に関する欧米秘書教育の内容について)と題して、接遇教育中心の我が国の秘書教育にも、欧米にみられるように、秘書のスーパーヴァイジング機能を取り入れるべきことを、欧米のテキストをとりあげ具体的に発表されました。

西澤真紀子先生の発表は、「秘書と広報」という題名で、近時「企業文化」として注目をあつめている広報をとりあげ、それを秘書業務の中のプロトコルの一分野として位置づけようとするもので、今後注目をあびそうな

分野の紹介でした。続いて、61年12月にとつたアンケート「秘書教育現場の悩み」をもとに、2分科会にわかれてグループ討議を行い、参加者からいろいろな悩みが出されました。残念ながら時間が足りずに十分深めることができませんでした。

第4回研究会は昭和62年10月31日、京都市の京阪電車丹波橋駅北口、京都経営経営専門学校2号館で行われました。

はじめは総会で、昨年度の活動報告、決算報告、監査報告が行われました。

次いで講演にうつり、京都の地場産業でユニークな週休3日制をとっている堀場製作所・河合由紀枝秘書課長の「週休3日制と秘書業務」というお話をうかがいました。週休3日制は、完全な週休3日制ではなく、毎日15分ずつ時間延長して月1回週休3日になるという変則的なものですが、将来は完全週休3日制になるだろうということでした。

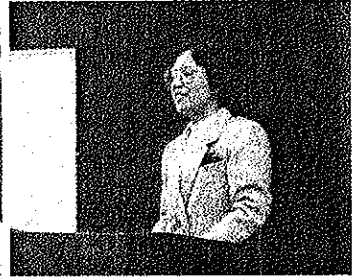
秘書業務については、堀場製作所における日常業務のお話で、その体験をもとに、秘書として望ましい人格についてのお話も出ました。現場の実務家のお話だけに説得力がありました。

続いて、かつて梅棹忠夫氏(現国立民族学博物館長)の京都大学人文科学研究所教授時代の秘書であった藤本ますみさん(聖泉短大講師)の「個人付秘書の特徴と問題点—梅棹研究室の例を通して—」と題する講演をうかがいました。梅棹教授の秘書になった経緯、どういった基準で教授が秘書を選択されたか、教授は、昔の大きな家にはデンとひかえて家

事万般を処理した「家刀自」がいたが、そんな「家刀自」のような秘書を考えていたこと。ポストと秘書の関係については、ポストは決断を下すもの、秘書は決断をうけて実行するものだが、そのとき1, 2, 3案ぐらい考えておくべきこと。いかにポストを効率よく働かせるかが秘書の役目であるなど、体験にもついたお話をうかがうことが出来ました。この体験をもとに、短大では、なるべく考えさせる授業をして、ヒントをたくさん与え、できるだけ答えを自分達で考え出させるというユニーク教育法をとっておられることを披露されました。

次いで研究発表にうつり、聖和大学の林雄太郎助教授の「法律(務)秘書に関する一考察(Ⅰ)」という、未開拓の分野の発表がありました。同助教授は、法律秘書を単に弁護士秘書のみに限定しないで、司法書士、行政書士、弁理士まで拡大して考えようという見解です。また、弁護士秘書についても、補完業務と補佐業務と二分して考えていこうという見解でした。新しい分野だけに皆さん関心がありました。何しろ時間の制約もあって発表が完結しえないままに終わったことが残念でした。また、今回は、研究発表がこの一件のみだったのは非常にさびしいことでした。次回からたくさんの発表者が出られることを期待しています。

最後に、前回、時間的制約もあって十分討議できなかった、「秘書教育現場の悩み」のアンケートをもとに、2分科会に分かれてグループ討議を行い、グループごとに、終了と同時に解散しました。(福永弘之 記)



● 中国・四国ブロック

- リーダー / 清水慶秀 広島女学院大学
- サブリーダー / 森貞俊二 松山東雲短期大学

- 運営委員 / 岡田 繁 川崎医療短期大学
- 胡 義博 鈴峯女子短期大学
- 佐藤正則 徳島文理大学
- 三宅耕三 香川短期大学

中国・四国ブロック研究会報告

松山で開催された第6回日本秘書学会の折、会場の「にぎたつ会館」で、6月18日運営委員会を持ち、11月28日、岡山で第4回の中国・四国ブロック研究会を開催することを決定。

7月20日、会員各位に暑中見舞いをおかぬ、

ハガキでこの日程を予告した。そして10月1日に正式の研究会開催の案内状を発送、11月5日までに発表申込みを依頼した。

11月9日から11日にかけて、広島ガーデンパレスで日本私立短期大学協会主催の「秘書教育担当者研修会」が開催され、多くの会員が参加されたので、ブロック研究会への発表申込み、参加の激減が予想された。しかし、それは運営委員の危惧にすぎず、5件の発表申込みがあり、別記のプログラムによる研究会が挙行されたのである。

全会員68名中30名の会員の出席と、これから会員になろうとする4名の方の出席(計34名)があり、13:05から16:25まで6名のかたがたの発表を中心に、時間の足らざるを痛

感するほど熱心な質疑応答と討議がなされた。

来年は広島ガーデンパレスで、鈴峯女子短期大学が当番校(世話人:胡 義博運営委員)となり、11月中旬開催の予定である。

第4回研究会開催に関し、会場設定、プログラム郵送、司会等と多くの労力を割愛して下さった「川崎医療短期大学」の会員の先生方に、心から謝意を表し、感謝をさげたい。

【別 記】

中国・四国ブロック研究会 第4回大会プログラム

1987年11月28日(土) 13:00~16:30

於 ホテル・ニューオカヤマ

13:00~開会の挨拶 ブロック運営委員長

清水慶秀 (広島女学院大学)

研究発表 I

〔司会〕大森健三 (川崎医療短期大学)

- (1) 13:05~ 開国当時の外国人秘書達の仕事とその歴史的意義
藤田雅子 (岡山女子短期大学)
- (2) 13:35~ コミュニケーションと稟議制度
柴山 正 (広島女子商学園)
- (3) 14:05~ 秘書教育と国語表現一特に言語表現教育の促進について一
西本 功 (就実短期大学)

休憩 (14:35~15:00)

研究発表 II

〔司会〕岡田 聚 (川崎医療短期大学)

- (4) 15:00~ 秘書学隣接及び関連諸科目関心度の分析手法に関する試論一成績とアンケート調査からみた相互関係一

一アンケート調査からみた相互関係一

◎三宅耕三 (香川短期大学)

中村寛志 (瀬戸内短期大学)

- (5) 15:30~ 秘書職志望に関する研究〔I〕
大武 正 (安田女子短期大学)
川瀬啓子 (安田女子短期大学)
磯田圭子 (安田女子短期大学)

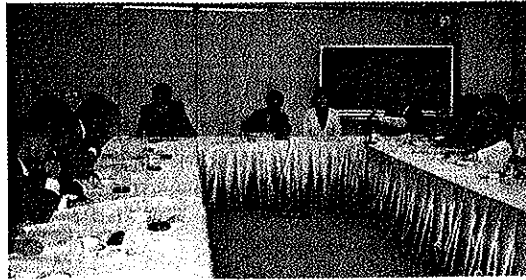
島田留美子 (安田女子短期大学)

(その1) 志望する学生の性格及び意識(川瀬)

(その2) 秘書と接遇(磯田)

16:25~ 閉会の辞

ブロック運営委員 佐藤正則 (徳島文理大学)
(清水慶秀 記)



九州・沖縄ブロック

●リーダー / 井下謙次郎 鹿児島女子短期大学

●サブリーダー / 内藤郁世 佐藤ビジネス専門学校

- 運営委員 / 井原伸允 香蘭女子短期大学
高 禎助 鹿児島女子短期大学
加島静江 中村学園短期大学
佐藤昭雄 近畿女子短期大学
千住 方 西日本新聞社秘書部長
田村幸子 福岡女子短期大学
中川厚子 長崎女子短期大学

3年目を迎えた九州・沖縄ブロック研究会は、5月9日、歴史とロマンの街、長崎市の東映イン長崎で、第5回研究会を開いた。参加者は地元長崎、佐世保を初め、福岡、佐賀、熊本、鹿児島など各県から40数名、予想を超える盛況であった。

まず、三菱重工業株式会社長崎造船所勤務部長山口明生氏が「学校教育と社会」と題して講演。同氏は短大講師としての経験をもふまえて、企業サイドからみた「望ましい秘書教育」について、

「高等教育は、本来、LEARNではなく、STUDYであるべきだ。まねる、習得するのではなく、研究し、考えなければならない。知識ではなく、教養である。従って、そこでは試行錯誤が行われ、多分のムダが発生する。このムダを恐れてはならない。多くのムダの積み重ねの中からこそ、その人の身についたバランス感覚、ユーモアのセンス、ゆとり、言いかえれば教養が生まれてくる。これこそが社会が、企業が求めているものだ。高等教育は人をつくるもの、とくに秘書教育はそうあるべきだ」と示唆に富んだ提言をされた。

「女性の能力開発に関する実態調査(南九州を中心として)の中間報告」のテーマで発表。この調査は、九州生産性本部の協力を得て、鹿児島県における企業、団体等約450社を対象にアンケート方式で実施、調査内容は女子新入社員教育、必要な資質、能力、オフィス・オートメーション、配置及び活用、秘書業務、採用及び採用計画、短大秘書教育への期待、女子短大生のイメージ、若者の行動に関する意見等16項目にわたっている。

秘書に関する研究会、このような会合が長崎で開かれたのは初めてとあって、地元長崎新聞は翌10日付紙面に掲載するとともに、さらに5月23日付紙面(婦人家庭欄)に「秘書一求められる専門的技術、企業と学校間でギャップも」と同研究会の模様を大きく報じた。長崎での研究会の盛況は、今後の地方活動の基礎固めの第一歩になる貴重な経験であった。

次の研究会は11月開催、鹿児島女子短大



の「女性の能力開発に関する実態調査」の結果が報告される予定であったが、その集計、分析作業が遅延、昭和63年1月下旬、福岡市で開かれる。

その間、福岡女子短大では、会員の田村幸子講師を中心に、5月から「秘書とOA」研究会がスタートした。同会には、九州朝日放送、テレビ西日本、岩田屋、博多大丸、西部ガス、九州相互銀行、福岡市役所、三菱電機OAプラザ等、福岡市の有力企業、官公庁の秘書職または秘書的業務に従事する方々が参加、教育の側からと実務側からとの意見交換が行われている。これまでのテーマは「通信と文書業務」「接遇、受付、名簿管理」「スケジュールリング」等。同研究会は、すでに第4回を数え、昭和63年3月終了の予定である。

こうした地道な研究会が各地に生まれることが切に期待されることであり、ブロック研究会としても、全面的にバックアップして行きたい。(井下謙次郎 記)

長崎新聞
昭和62年5月23日付



第7回全国大会のご案内

日本秘書学会第7回総会並びに全国大会の会場及び概略日程が下記のとおり決定しました。

現在本大会での研究発表を募集中です。秘書学及び秘書教育に関するものでテーマは自由です。応募の締切りは昭和63年3月10日(内)です。応募要領の詳細案内は、会員にはすでに送付済みです。お問い合わせは学会事務局

まで。
なお、詳細な「大会プログラム」及び「参加要領」は、5月止旬までに大会委員会(委員長:市郵学園短期大学 横山静児教授)からご案内いたします。

《第7回全国大会 概略日程》

- 大会期日 / 昭和63年6月23日(木)・24日(金)の2日間
- 会場 / 愛知厚生年金会館

名古屋市千種区池下町2丁目63
Tel 052-761-4181

●概略日程

- 6月23日(木)
 - 9:40~16:40 総会、講演、研究発表
 - 18:30~20:00 懇親会
- 6月24日(金)
 - 9:30~14:30 テーマ別研究会
(シンポジウム)